

インターンシップの学習効果を高める施策と評価

－ BINGO OPEN インターンシップにおける 2 つの実践研究から －

前田 吉広* 向井 勝也**

Measures and Evaluation to Enhance Internship Learning Outcomes

Yoshihiro MAEDA* Katsuya MUKAI**

ABSTRACT

With the aim of deriving educational and support methods that enhance the effectiveness of learning through internships, we report on practical research on two themes conducted during the BINGO OPEN internship in FY2022. The first theme is a comparison and discussion of the results of a diagnostic test of basic skills for working adults and the results of self-assessment of ability elements in the basic skills for working adults chosen by the students themselves. The second theme compares the reports of students who received career counseling and those who did not, and examines the effectiveness of the counseling. Through practical research on these two themes, we were able to extract various ideas for improving and enhancing internships.

キーワード：インターンシップ、社会人基礎力、自己評価、キャリアカウンセリング

1. はじめに

近年、高等教育機関におけるキャリア教育の重要性は増しており、学生のキャリア形成に有効とされるインターンシップに対しても期待が高まっている。効果的で質の高いインターンシップを学生に提供するため、インターンシップの目的や内容等に応じた、産官学での共通理解が求められている。2022 年、採用と大学教育の未来に関する産学協議会から提示された「産学協働による自律的なキャリア形成の推進」¹に基づき、三省合意の改正がおこなわれた。その中で政府は、学生のキャリア形成支援活動を 4 つのタイプに類型化し、これからのインターンシップの定義として、企業での実務を体験することが必須とすることなどを提示している²。このような共通理解が求められる背景として、「インターンシップ」という名称を用いた就業体験を含まない会社説明会やイベントなどが増加し、多様化したことが一つの要因としてあげられる。「インターンシップとは何か？」という問いに対する答えが、産官学及び学生で正しく共有されなければ、インターンシップを通じて得られる経験や能力が全く異なるものになってしまう恐れがある。大学は、今回政府がおこなった三省合意の改正に沿って、改めて教育的観点からインターンシップを見直し、より教育効果の高いインターンシップを開発していく必要があると考える。

福山大学では、大学主導で運営している BINGO OPEN インターンシップを通じて、2013 年度より社会人基礎力³の指標を使用し、学生個人に対するフィードバックや成長分析、インターンシップを

*大学教育センター講師

**大学教育センター特命講師

通じた学習成果の定量的な把握に取り組んでいる。本研究では、社会人基礎力の指標を利用した目標設定と自己評価による学習効果の検証と、インターンシップ実習後のキャリアカウンセリングによる振り返りを通じた学習効果の検証の2つのテーマについて実践報告をおこなう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インターンシップを通じた学習効果を高める教育方法及び支援方法を導き出すことである。本研究は、2021年度におこなったBINGO OPEN インターンシップに関する実践研究^{4,5}を更に発展させたものである。1つ目の研究では、インターンシップ参加前後での学生の成長を新たな視点から捉えるため、社会人基礎力を指標に用いて客観的な評価をおこなう社会人基礎力診断テストに加え、実習者自身の視点から自身の成長を評価する目標達成度チェックシートの2つの評価結果を比較して、それぞれの評価の特徴を導き出し、今後の学習支援につなげることを試みた。2つ目の研究では、インターンシップ参加後の振り返りを促す「キャリアカウンセリング」を受けた学生と受けなかった学生の体験レポートを比較し、キャリアカウンセリングの有効性を検証し、その効果を明らかにすることを試みた。これら2つの実践研究は、インターンシップに参加した学生の振り返りを促し、実習中の体験を客観的に捉える視点を養い、自己理解の深化へとつなげる効果が期待できる。

3. 研究の仮説と検証方法

本論で紹介をおこなう2つの研究テーマについて、それぞれの仮説と検証方法を述べる。

3-1. テーマ1. 社会人基礎力を用いた診断結果と自己評価の比較考察

2021年度におこなった実践研究（前田、向井, 2022）⁴では、インターンシップ参加前後における社会人基礎力診断テストの結果を比較し、3つの軸（学年、学部、インターンシップ類型）で学生を分類した後、それぞれにおける能力要素の変化の違いを調査・考察した。今回はインターンシップ参加前後の社会人基礎力診断テストの結果と、学生自身が実習を通じて伸ばしたいと選んだ社会人基礎力の中の能力要素の自己評価を比較し、客観的な評価と主観的な評価の違いについて調査・考察した。

本研究テーマの仮説は2つある。1つ目は、社会人基礎力診断テストの変化のみを振り返るのではなく、自ら選択した能力要素に関する主観的な評価も考察対象に加えることで、自身の成長に関わる新たな気づきが増えるのではないかというものである。2つ目は、学生自身が目標に定めた社会人基礎力の能力要素と社会人基礎力診断テストの結果に、何らかの相関関係があるのではないかというものである。この2つの仮説を検証するため、1つ目については、2回の社会人基礎力診断テストの結果を比較したデータと、学生が実習前に定めた目標の達成度を実習1日目と最終日で比較したデータのそれぞれにおいて、「プラス変化」「マイナス変化」「変化なし」の3種類に分類し、社会人基礎力の能力要素と照らし合わせて特徴の違いを考察した。2つ目については、学生がインターンシップ実習中に成長を意識して取り組んだ社会人基礎力の能力要素と、社会人基礎力診断テストによる能力数値の変化との間に相関関係があるかどうかをウェルチのt検定を用いて分析した。

3-2. テーマ2. インターンシップ参加後のキャリアカウンセリングの有効性について

2021年度におこなった実践研究（向井、前田 2021）⁵では、インターンシップ及び社会人基礎力事後診断後にキャリア・カウンセリングを実施することによって、学生自身が向上能力とその要因に気づき、そしてその後の学生生活における学びと行動目標を学生自身がデザインすることができることを、キャリア・カウンセリングを受けた学生のアンケート分析によって考察した。今回の研究では、検証群（キャリア・カウンセリングを受けた学生）と比較群（キャリア・カウンセリングを受けな

った学生)に有意差が認められるか、全学生が提出する「体験レポート」の記述内容を分析して、ウェルチのt検定を用いて検証することとした。

4. 研究の概要

本論で紹介する2つの実践研究では、共通して利用されるデータが複数存在する。説明の重複を避けるため、各テーマの取り組みの詳細説明に入る前に、研究の全体像と調査対象者、共通して利用する3種類のデータについての説明をおこなう。

4-1. インターンシップの全体像

2022年度のBINGO OPEN インターンシップは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた2020年度以前のインターンシップ運営と同様、4月のオリエンテーションに始まり、12月の合同成果報告会で終わる、約9ヶ月間のプログラムとなっている(図1)。

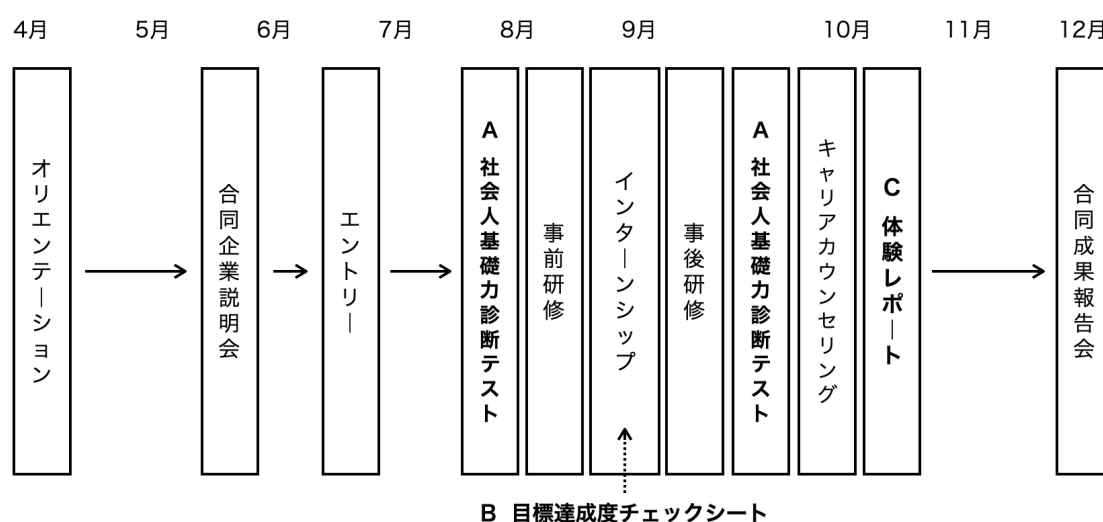


図1 2022年度 BINGO OPEN インターンシップの年間スケジュール

本論で紹介する2つの実践研究では、事前研修前と事後研修後の2回実施する図1中の「A 社会人基礎力診断テスト」の比較結果と、事前研修時に学生自身が定めた3つの目標に対して、インターンシップ期間中毎日その目標の達成度を記録した、図1中の「B 目標達成度チェックシート」を共通して使用している。また、テーマ2のキャリアアカウンセリングに関する実践研究では、キャリアアカウンセリング修了後に提出が求められる図1中の「C 体験レポート」の記述内容を用いて、キャリアアカウンセリングの有効性についての検証をおこなっている。

4-2. インターンシップ参加学生

2022年度のBINGO OPEN インターンシップ参加学生は154名で、2021年度の参加学生数126名と比べ約22.2%の増加となった。参加学生の学年、所属学部の内訳は以下の通りである(表1)。BINGO OPEN インターンシップ参加学生の83.1%(128名)が3年生で最も多く、次いで2年生が16.2%(25名)、1年生は0.6%(1名)という割合となった。参加者の多い所属学部は、上から経済学部の57名(37%)、工学部41名(26.6%)、人間文化学部31名(20.1%)、生命工学部25名(16.2%)となった。

表1 調査対象学生（154名）の分類

学年			
	1年生	2年生	3年生
人数	1名	25名	128名

学部				
	人間文化学部	経済学部	工学部	生命工学部
人数	31名	57名	41名	25名

4-3. 共通データ①「A 社会人基礎力診断テスト」

2022年度に実施した社会人基礎力診断テストは、株式会社マイナビが提供するオンライン診断「MATCH plus」⁶を利用した。この診断テストは、就職情報サイト「マイナビ (<https://job.mynavi.jp/>)」に会員登録をすることで、大学生であれば誰でも無料で受診することができる。合計162問の選択問題に回答することで、社会人基礎力の12の能力要素がそれぞれ10段階で表示される。期間を開けてこの診断テストを実施すると、前回の診断結果との比較データがグラフでわかりやすく表示される(図2)。診断結果には社会人基礎力の12の能力要素に加え、パーソナリティの傾向や向いている業界・職種の適正、キャリアに対する意識など、学生の自己理解を促す分析結果なども記される。学生はインターンシップの事前研修実施前(7/17～7/29)と事後研修実施後(9/17～9/23)の2回、この「MATCH plus」を受診して自らの社会人基礎力を測定した。

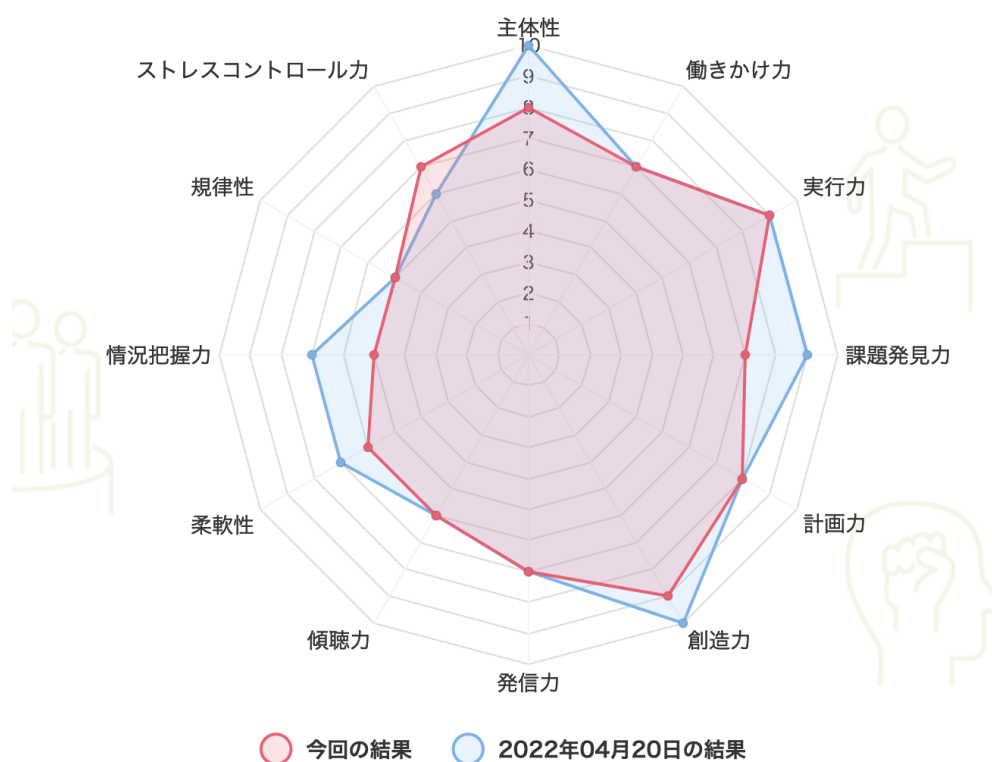


図2 社会人基礎力の診断結果（イメージ）

4-4. 共通データ②「B 目標達成度チェックシート」

目標達成度チェックシートは、学生自らが設定した目標に対して、実習期間中毎日その目標が達成できたかどうかをチェックするためのワークシートである（図3）。ワークシート左側に記載した3つの目標に対して、日々その目標の達成度を振り返り、翌日取り組むことを考える一連の振り返りを5日間分記載することができる。目標の達成度を点数化して記録することで、実習期間中の日々の変化を定量的に捉えることができるように工夫されている。学生は事前研修の際、社会人基礎力の12の能力要素と地域の企業が求める3つの力（「挨拶・笑顔」「報告・相談」「意欲・積極性」）の中から、自分がインターンシップを通じて伸ばしたい力を3つ選び、それらの力を伸ばす具体的な目標を設定した。実習期間中は、日々の振り返りと翌日取り組むことを記載した後、企業担当者の確認とフィードバックを得ることを指示し、実習終了後、ワークシート右側の枠に振り返りを記入して提出するよう求めた。

学生番号		氏名		インターンシップ参加企業名				
NO	目標	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	達成度・振り返り	
1	キーワード1							
	具体的な目標	/100	/100	/100	/100	/100		
	点数の理由							
	明日、取り組むこと							
2	キーワード2							
	具体的な目標	/100	/100	/100	/100	/100		
	点数の理由							
	明日、取り組むこと							
3	キーワード3							
	具体的な目標	/100	/100	/100	/100	/100		
	点数の理由							
	明日、取り組むこと							
確認とコメント ※企業担当者記入欄							※「確認とコメント」欄は、企業担当者の方に毎日の記入内容を確認して頂き、背印もしくはコメントをもらって下さい。	

図3 目標達成度チェックシート

4-5. 共通データ③「C 体験レポート」

体験レポートは、事前及び事後の研修を含む BINGO OPEN インターンシップの学習プログラムを通じて学んだこと、気づいたことなどについて 2,400 文字程度の文章にまとめて提出する報告書である。インターンシップに参加した動機や目的を達成できたかどうかの振り返りに加え、インターンシップの経験を今後の大学生活でどう活かしたいかといった今後の目標についても記載が求められている。インターンシップを通じた成長を自らの言葉で表現する重要な学習機会の一つであり、単位取得を希望する学生にとっては成績評価の対象でもある。BINGO OPEN インターンシップの最終イベントである合同成果報告会の発表者選考にも用いられる。学生は、事後研修から約3週間後の提出締め切りまでに、体験レポートを作成することが求められる。

5. 結果と考察

本論で紹介をおこなう 2 つの研究テーマについて、それぞれの研究結果と考察を述べる。

5-1. テーマ 1. 社会人基礎力を用いた診断結果と自己評価の比較考察

2022 年度のインターンシップ参加者 154 名のうち、社会人基礎力診断テストを事前・事後の両方とも受診し、且つ目標達成度チェックシートを提出した計 97 名をテーマ 1 の調査対象者とした。本研究では、インターンシップ参加前後における診断テストの能力要素の変化、及び自己評価の変化をそれぞれ 3 つのグループ（プラスの変化、マイナスの変化、変化なし）に分類し、それらのグループに属する人数を比較し考察した。初めに、社会人基礎力診断テストの結果を事前及び事後で比較し、前述の 3 グループ（プラスの変化、マイナスの変化、変化なし）で分類したところ、各グループの人数は以下のような結果となった（図 4）。

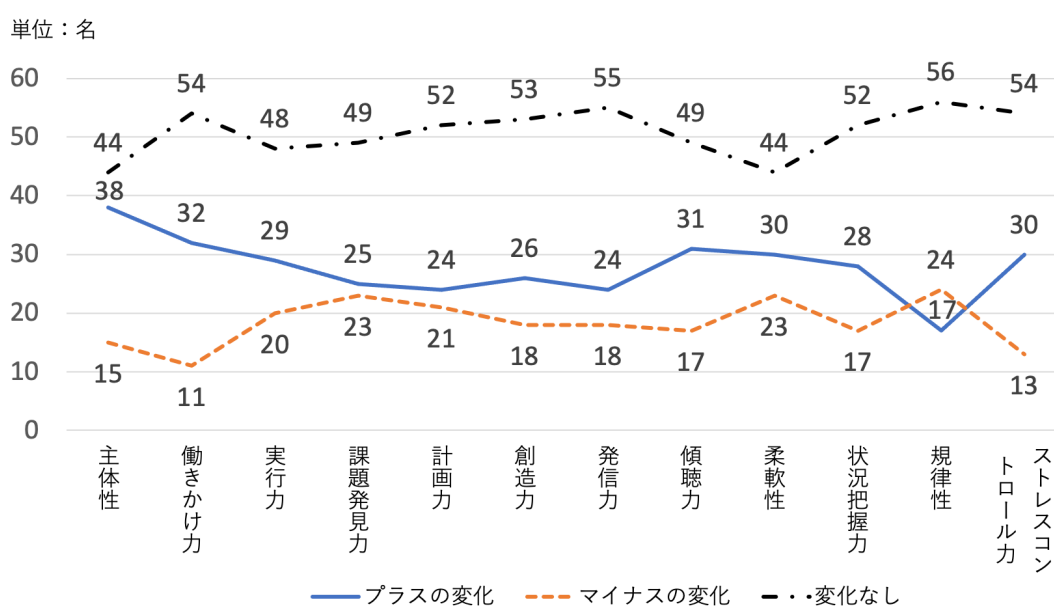


図 4 社会人基礎力診断テストの変化

上図より、診断テストの変化の分類においては、社会人基礎力の全ての要素において「変化なし」が最も多い結果となった。この結果は、近年のインターンシップに対する期待と反するかもしれないが、企業ごとに様々な実習プログラムを提供する短期間（基本的には 5 日間）の職場体験では、社会人基礎力の大幅な向上は望めないという客観的な現実の一部を表しているとも言える。変化がプラスのグラフ（青・実線）とマイナスのグラフ（オレンジ・点線）を比較した場合、規律性を除く 11 の能力要素に於いてプラスの変化がマイナスの変化を上回っており、全体としてはインターンシップを通じて社会人基礎力の向上が見られる学生が多く存在すると言える。

次に「目標達成度チェックシート」に関する考察を行う。本研究テーマの調査対象者 97 名が事前研修時にインターンシップを通じて伸ばしたいと選んだ 3 つの力を整理したものが次の表 2 である。最も多くの学生が選んだ力が、社会人基礎力の「主体性（64 名）」で、「課題発見力（38 名）」「傾聴力（34 名）」「発信力（25 名）」がそれに続く結果となった。「主体性」を選択した学生が全体の約 3 分の 2（66.0%）を占めていることから、主体性の向上がインターンシップ参加学生にとって成長ニーズの高い要素であると言える。一方で、その他の社会人基礎力の能力要素や地域の企業が求める力について、目標に設定した学生が少なからず存在することも確認できる。大学及び受入企業は、こういった少数

の成長ニーズに対しても個別に対応し、インターンシップを通じた成長の支援をおこなっていく必要があると考えられる。

表2 学生がインターンシップを通じて伸ばしたいと選んだ力

主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力
64名	6名	21名	38名	21名	18名	25名	34名
柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力	挨拶・笑顔	報告・相談	意欲・積極性	
14名	12名	7名	13名	6名	3名	9名	

※複数選択の延べ人数

続いて「目標達成度チェックシート」に記載された3つの能力要素について、それぞれ実習1日目の評価点と最終日の評価点を比較し、前述の社会人基礎力診断テストと同様に「プラスの変化」「マイナスの変化」「変化なし」の3グループに分類したところ、次のような結果となった（図5）。

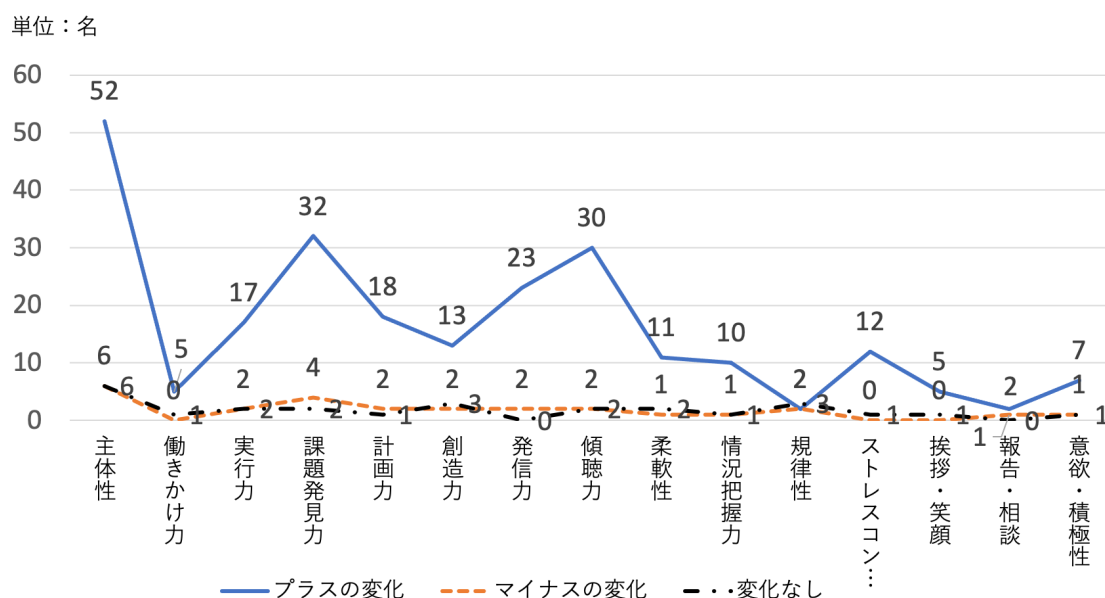


図5 社会人基礎力を指標に用いた自己評価の変化

社会人基礎力診断テストの変化を表すグラフ（図4）と比較すると、明らかに「プラスの変化」が多く見られる結果となった。ワークシートを用いて自ら設定した目標の達成度を日々評価することで、目標達成に近づくプロセスを客観的に振り返ることができたことが、自ら設定した能力が向上したという自己評価につながったと考えることもできる。伸ばしたい力として最も多くの学生が選んだ「主体性（64名）」については、52名（約81.3%）がプラスの変化があったと評価した。その一方で、「マイナスの変化」もしくは「変化なし」と自己評価した学生も、少数ながら存在している。このような自己評価の学生に対しては、どのような視点で日々の振り返りを行い、自己採点をしているのかを注意深く確認して、失敗や問題を捉える視点を変えたり、そこでの学びを次に活かせるようにフォローを行ったりするなどの、学生が求める成長につなげる支援が求められる。

次に、各学生が「目標達成度チェックシート」を用いて目標設定した3つの能力要素と、社会人基礎力診断テストの診断結果の変化との間に相関関係があるかどうかについての調査をおこなった。3つの目標設定に挙げた学生群と、挙げていなかった学生群について、事前診断と事後診断の数値変化

を比較したものが次の表である（表3）。ウェルチのt検定（2群の分散が等しくない場合の差の比較）による片側検定をおこない、有意水準5%、すなわちp値<有意水準 $\alpha=0.05$ のとき「有意差あり」とした。

表3 ウェルチのt検定による片側検定の結果

	目標設定群(名)	変化の平均	比較群(名)	変化の平均	P(T<=t)片側	有意差
主体性	61	0.557	36	-0.028	0.0046	あり
働きかけ力	8	0.375	89	0.337	0.4486	
実行力	21	-0.048	76	0.053	0.3756	
課題発見力	39	0.205	58	0.121	0.3660	
計画力	22	0.000	75	0.067	0.3888	
創造力	17	0.412	80	0.100	0.2035	
発信力	25	0.440	72	-0.014	0.0375	あり
傾聴力	34	0.471	63	0.143	0.0928	
柔軟性	11	0.182	86	0.047	0.2866	
状況把握力	12	0.833	85	0.082	0.0551	
規律性	7	-0.286	90	-0.089	0.1836	
ストレスコントロール力	12	0.333	85	0.165	0.3208	

当初の仮説では、学生が目標設定を行った能力要素と社会人基礎力診断テストによる診断結果の変化との間に相関関係があることを証明したかったが、今回の調査結果から有意差が見られたものは「主体性」と「発信力」の2つの能力要素のみとなった。インターンシップの実習内容によっては、事前に設定した目標を達成することが難しいものも存在する可能性があり、一概に全ての社会人基礎力がインターンシップによって向上できるものに改善していくことは難しいが、インターンシップの類型（対面型、オンライン型、混合型）によって成長する能力要素に違いがあることを導き出した2021年度の実践研究結果と併せて、インターンシップを通じた教育効果を高める教育方法及び支援方法の導出につなげたい。

5-2. テーマ2. インターンシップ参加後のキャリアカウンセリングの有効性について

昨年度に引き続き、国家資格キャリアコンサルタント有資格者2名が希望する学生に対して、次のとおりキャリア・カウンセリングを実施した（表4）。

表4 キャリア・カウンセリングの実施概要

実施期日	事後研修、社会人基礎力事後診断後
実施時間	一人当たり約20分
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップを通じた学びと成長 ・社会人基礎力診断の事前と事後でスコアが上昇した能力要素と、上昇した要因 ・実習で得た経験をどう活かすか。特に自分にとって重要と考える能力要素をどのようにして伸ばしていくか。

2022年度のインターンシップ参加者154名のうち、体験レポートを期限内に提出した105名をテーマ2の調査対象者とした。

(1) インターンシップ後の学生生活における学びと行動目標をデザインするにあたり、キャリア・カ

ウンセリングは有効だったか。

体験レポートの指針の一つに「インターンシップでの経験を今後どのように活かしたいか」を挙げた。事後研修会時には具体的指針を説明したため、ほとんどの学生が体験レポートに記述している。提出された 105 名の体験レポートについては評価の観点を設け、それぞれ 5 段階の評価基準を設定して評価したが、そのうち「実習で得た経験を今後どう活かしたい? という観点で評価し、キャリア・カウンセリングを受けた学生・受けなかった学生に分けて集計した結果が表 5.である。

表 5 評価の観点「実習で得た経験を今後どう活かしたいか」の評価結果集計

評価	キャリア・カウンセリング実施者	キャリア・カウンセリング非実施者
5	29.0%	7.0%
4	33.9%	32.6%
3	16.1%	20.9%
2	16.1%	23.3%
1	4.8%	16.3%
平均値	3.66	2.91
度数(人数)	62 名	43 名

ウェルチの t 検定 (2 群の分散が等しくない場合の差の比較) による片側検定をおこなうと、t 値 $=0.0012 < 0.05$ となり、有意水準 5% で「有意差あり」と言えた。すなわち、キャリア・カウンセリングを受けた学生の方が評価結果が高く、実習で得た経験を今後の学生生活や就職活動で活かすための具体的な計画を書くことができていると言える。キャリア・カウンセリングが有効であったと言える。

(2) 社会人基礎力診断事前・事後でスコアが上昇した能力要素について、上昇要因を明らかにするためにキャリア・カウンセリングは有効だったか。

体験レポート期限内提出者 105 名の内、社会人基礎力診断(事前・事後)実施者 81 名について、体験レポートの記述を見ていった。記述を見たところ、各学生が「目標達成度チェックシート」を用いて目標設定した 3 つの能力要素 (前項 5.1 表 3 参照) についてのみ記述しているケースがほとんどだった。そこで、要因を具体的に記述することができたかどうか、キャリア・カウンセリング実施者と非実施者に分けて集計した。なお母数が少ないため、目標設定上位 4 要素の集計結果を表 6.に示す。

表 6 社会人基礎力診断で能力要素が上昇した要因を具体的に記述した学生数集計

		主体性	課題発見力	傾聴力	発信力
キャリア・カウンセリング実施者	要因を書いた学生数	17	7	11	8
	目標設定した学生数	35	19	18	18
キャリア・カウンセリング非実施者	要因を書いた学生数	9	5	4	2
	目標設定した学生数	27	19	16	6

データ数が少ないため検定を行っていないが、要因を具体的に記したことが認められた学生が、キャリア・カウンセリング実施者の方が非実施者より多く、(1)と同様、キャリア・カウンセリングが有効であったと考えられる。

今回、能力要素向上要因記述に共通した名詞・動詞が現れているのではと考え、「主体性」を挙げた学生の記述についてテキストマイニング分析した。(図 6)

【注】

- 1) 採用と大学教育の未来に関する産学協議会(2022)「産学協働による自律的なキャリア形成の推進」
https://www.sangakukyogikai.org/_files/ugd/4b2861_80df016ea6fe4bc189a808a51bf444ed.pdf
(2022. 11. 16 閲覧)
- 2) 文部科学省 他 (2022)「インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方」
<https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/PDF/20220613002set.pdf> (2022. 11. 16 閲覧)
- 3) 経済産業省 (2018)「人生 100 年時代の社会人基礎力について」
https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairiyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf (2022. 11. 23 閲覧)
- 4) 前田吉広, 向井勝也 (2022)「BINGO OPEN インターンシップの教育効果について -実習前後の社会人基礎力診断テストを基にした一考察-」福山大学大学教育論叢(8), pp. 131-139
- 5) 向井勝也, 前田吉広 (2022)「インターンシップを通じた成長評価と支援 -社会人基礎力向上に向けた取り組みにおけるキャリア・カウンセリングの有効性-」福山大学大学教育論叢(8), pp. 143-156
- 6) マイナビ「キャリアデザインツール 適正診断 MATCH plus」
<https://job.mynavi.jp/24/pc/forward/forwardLowerGradeMatch/index> (2022. 11. 23 閲覧)